

これまで研究会に参加していた大学等の活動紹介

大久保 忠旦・福島 二郎

第Ⅱ章に紹介されている研究課題と主な研究成果のほかに、発足当初から2,3年の間に活動し成果を上げたが、その後の転勤などで惜しくも中断された研究課題を、以下に紹介しておきたい。

(1) 大学コンソーシアムとちぎ 産学官サテライトオフィス (大野邦雄コーディネータの発案による)「山あげ祭に女子留学生の参加」と「留学生による那須烏山まち歩き体験」：先に第Ⅱ章の活動の趣意の項で述べたように、宇都宮大学と宇都宮共和大学および国際情報ビジネス専門学校などには県内でも留学生の在学が多い。この留学生たちに、那須烏山地域の風土と文化的伝統に触れてもらうことを主な目的として、ひとつは女子留学生たちに、浴衣を着て山あげ祭の山車の引き手になってもらう試みを行なった。

元田町自治会(川匂会長)をはじめとして、国際交流協会(鈴木邦雄会長)、山あげ祭実行委員会、商工会、市役所ほかの関係団体の協力により、2006年7月22日の山あげ祭において実現した。浴衣と草履は、引き手となった女子留学生に元田町が寄贈し、着付け指導は日本和装宇都宮学院(大塚久美子学院長)の先生方が担当された。

参加留学生の所属は、宇都宮大学、宇都宮共和大学、作新大学、白鷗大学、セントメリー日本語学校、国際情報ビジネス専門学校で、出身は、中国、中国内モンゴル自治区、米国、ドイツ、韓国、香港で29名であった。学生たちは、珍しい貴重な経験だったことと浴衣を贈られたことで大喜びであった。



留学生による那須烏山まち歩き体験は、同じ2006年6月に実施。烏山地区の街と観光地を先ず歩いてもらい、商工会館に戻って、その体験の率直な感想(本音)を話してもらった。宇都宮共和大学から在学留学生10名(男女各5名、中国、台湾、韓国、モンゴル出身)と夫光植教授および大久保研究会委員長が参加、那須烏山市役所から大谷市長、佐藤部長、木村主幹、鈴木主査、那須烏山商工会から星事務局長、荒井課長、加藤主査、それに(株)ダイサン/田村専務、滝(広報紙、キャンパスネット)の各氏が参加した。その“本音トーク”の主なものは以下のようであ

った。

① 那須烏山の良い点：自然がとても豊か、空気も澄んでいて癒される。砂漠の広がるモンゴルに比べ、緑が多く住み易いと思う。 ② 那須烏山の不満な点：烏山の街に若い人が歩いていない。物を買いたくなるような店がない。お土産店が少ない。車がないと楽しめるところがない。③ 那須烏山市に対する提案：自然環境を生かして落ち着ける施設があればストレスを癒すのにいい場所になる。別荘を作って老人がそこを拠点に活動できるようにしたら高齢化対策になる。島崎酒造の洞窟の中で試飲や名産品を食べられるようにすれば臨場感があっていい。龍門の滝のところにホテルを作り泊まれるようにしたらいい。滝で水遊びができるといい。わらび荘は森の中にあり良いところなので、バーベキューなど食事ができるような施設や小屋があればデート場所としてもよい。・・・などで、そのほか、④ 栃木県人について：はっきり物事を言わない。会社の面接で、言葉が障害だと会社側が思っているようだがはっきりと本人に言ってくれない。どの街もお店を早く閉めてしまう。でも、栃木県の人々はとても親切だと留学生の皆が感じている。・・・などであった。

(2) 作新学院大学 前橋明朗ゼミによる、“コミュニティービジネスモデル・チャレンジショップ経営” (35 番館カフェ経営の試み)：ゼミ学生の経営学実践の場として、閉鎖されていた 35 番館 (棚橋氏所有) を借り、学生主体のチャレンジショップとしてカフェを運営する試みを行い、学生のボランティアでほぼ数カ月で黒字経営を実現した。学生の卒業にともない 1 年目 (2007 年度) だけで終わったが、前橋ゼミはのちにこのノウハウを生かし、鹿沼市で再度学生カフェ経営を試みて成功、経済産業大臣賞を受賞したとのことである。



(3) 国際医療福祉大学 安藤由美ゼミ：若者の意識調査を実施し、その結果に基づいて、“那須烏山市を若者にとって「住みたい」「住みやすい」町に”をテーマとした提言に繋げた。意識調査の対象は那須烏山市在住の高校生、国際医療福祉大学の学生であり、あわせて 552 人からデータを取得。50 歳代の市民から取ったデータとも比較し、「若者」にターゲットを絞った提言とした。意識調査の結果、若者 (10・20 歳代) にとって住みたい町の最上位の条件としてあげたのは「買い物する場所が便利」なことであり、その次にあげた条件は「遊ぶ場所が多い」ことであっ

た。3番目とした条件は「交通の便（電車）」であり、これらは高校生と大学生に共通している。

住みやすさを感じる町の条件としたのは、「買い物する場所がある」、「遊ぶ場所が多い」、「交通の便（電車）」であり、住みたい町の条件と一致した。50歳代があげた条件でも「交通の便（電車）」（最上位条件）、「遊ぶ場所」（2位条件）は上位条件であったが、若者が最上位条件としてあげた「買い物をする場所」は8位であり、若者（10歳・20歳代）との大きな差異が認められた。

近隣の自治体を選択範囲とした「住みたい町」はどこかという設問に対しては、「宇都宮市」「大田原市」に対する回答が多かった。若者の都市部希望傾向がうかがえた。

若者の考えるような便利さや魅力を整備すると同時に、彼らに知られていない「住みよい点（便利な点）」を知ってもらうことも重要であると提言されている。

（4）小山工業高等専門学校 酒入陽子ゼミ： “まちづくりへの歴史分野からの提案” を目標に、市内の歴史研究会として活動している『那須氏研究会』との共同で、① 市民に郷土の歴史的な意義の理解と愛着を醸成する、② 市外からの来訪者にも市域の史跡と伝統文化の重要性をアピールできるようにする、③ その市域の史跡と伝統文化を観光資源として活用する、の3点を目的として研究した。2009～2011年にかけて、那須烏山市域の歴史的建造物と文化財を調べる“町並み調査”を酒入ゼミ学生が担当し、稲積城（那須烏山市下境）の城主と那須氏との関わり、烏山城とその周辺村落の歴史の解明を、那須氏研究会（長内光弘氏）が担当した。

町並み調査は、散策できる史跡として、宮原八幡宮（烏山藩領の総社、本殿のほか鳥居、江戸の紙商人が寄進した石灯籠など）、八雲神社（山あげ祭の起点）、烏山城址と武家屋敷跡地・老舗店群、天性寺（歴代烏山藩主の菩提所）、泉溪寺（殺生石の源翁の開山）、寿亀山神社（江戸幕府老中・烏山城主、大久保常春を祀る）、滝の太平寺（藩主大久保氏菩提寺、蛇姫の墓）などについて、徒歩ルート、自転車ルートの散策コース案を提案した。

那須氏研究会の研究では、那珂川の河畔の那須烏山市下境にある稲積城は、那珂川の中州ともいえる位置にあり孤島のような地形を持つ。城郭内に稲積神社があり、その神社縁起書に、築城が西暦1109年（天仁2年）で初代城主は須藤太郎資通と書かれている。周囲の地名も、小字の名になっている御城・中城・下館・外城があり、それぞれの地に大きな館が連なって建つ連郭式の城であった。1165年（永万元年）に資通の曾孫の宗資が那須資房と名乗り、城も稲積城と名付けた。稲積神社は那須氏の氏神である。2009年は築城900年に当たるので、かねて提唱していた自然遊歩道 茂木～白河線の設定を成功させたことと併せ、「稲積城跡」の誘導標識4基の設置を提案し、それに市が応えた。